

# 無医地区防げ師の導き

美咲町の西、住民約2300人の半分が65歳以上という旧旭町地区。地区唯一の診療所の閉院が決まり「無医地区」になりかけた2年前、理事長を務める真庭市の社会医療法人・金田病院に白羽の矢が立った。難題山積みのなかで管理運営を引き受けたのは、「地域医療の師匠」の教えがあったからだ。町営となつた西川診療所にはいま、多くのお年寄りらが集まっている。

前身の民間法人が閉院を公表し、町は日頃からこの地区の住民の入院や救急を受け入れるなどしていた金田病院に指定管理者を打診した。頼まれて最初は戸惑つた。自院の医師ですら確保が難しい。診療所は溪谷の細道を通つて約12分、車で20分30分かかる。「医師を継続派遣できるか、経営は成り立つのか」懸念に悩む時、心に浮かんだのは、師と仰ぐ故・高橋重雄氏の教えだ。「民間病院は地域に貢献することのみ生き残れる」

高橋さんは父が第2次世界大戦中に海軍医として南方戦

## 真庭市の金田病院理事長 金田 道弘さん(66)

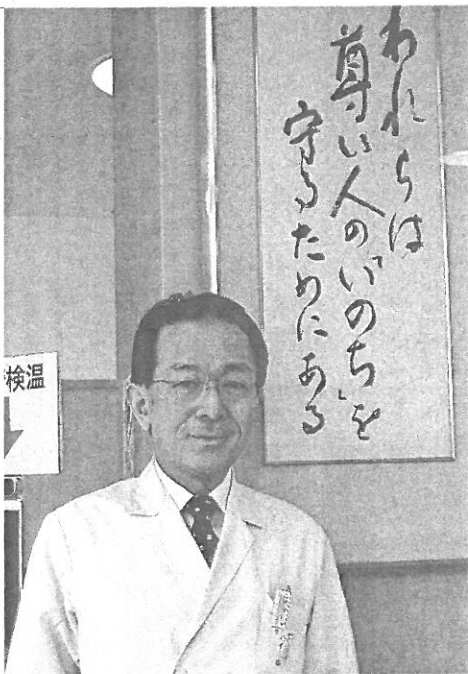
線で死線をくぐつた時、部下の衛生兵だった。父が戦後に創立した金田病院では運営面を支えた。医師の道を志したのは、父と高橋さんを見て育つたからだ。

川崎医大を卒業後、岡山大病院などで外科の修業を積んだ。29歳で赤十字国際委員会の難民救援医療班としてカンボジアへ。地雷で両足を失い、頭に被弾した兵士の救命治療に3カ月奮闘した。帰国し、父の元で腕を振る

い始めた矢先。父が脳梗塞で倒れ、病院の理事長職を継ぐことになった。31歳。「右も左も分からない若造を、高橋さんが支えてくれました」。

西川診療所の存続を導いた言葉は、その時にたたき込まれた理念だ。

高校生のころに聞いた高橋さんの考えを鮮明に覚えてい



かねだ・みちひろ 1954年生まれ。スキー歴は60年で全日本スキー連盟の検定1級。今冬も多忙な仕事の合間を縫い、蒜山のスキー場へ通う。2001年に県内初の連盟公認ドクターパトロールの資格も取得。けが人が出ると、滑っている最中でも応急処置にあたる。病院待合室には父が南方戦線で得た思い出を掲げる写真。



西川診療所 美咲町里

逆としか見えなかつた提言が、半世紀が過ぎたいま、地域医療が直面する課題そのものになっている。

金田病院も、旭川を挟んで

近接するライバル病院と、「川中島の戦い」と地元で呼ばれるほどの激しい競争を繰り広げていた。だが近年、両病院は協議を重ね、外来診療表を裏表で共有するパートナーになった。高橋さんの「予言」通りで、「未来が見えていたとしか思えない」と舌を巻く。

コロナ禍で地域医療が大きく揺さぶられている。「コロナ後の時代」をどう生き抜くかも重いテーマだ。あなたならどうしたでしょうか。師匠に日々、問いかける。

(中村通子)

減を求められています、医療機関が不要になるわけではありません。医療機関が突然消えると、住民や職員の打撃が大きい。医療は社会インフラですから。

——競合病院との共生などが重要ですね

近隣病院との連携による診療の内容と規模の適正化や、医療資源の適正配置は経営継続にも不可欠です。コロナ禍で10～20年ほど先だったはずの未来が一気に襲ってきました。ライバルから同志に。「師匠」が50年前に見抜いた流れこそ、コロナ時代に地域が求める役目を果たすことになるでしょう。

## コロナ禍医療再編の波 一気

——コロナ禍で地域医療はどう変わりましたか

感染症対策に、より一層の配慮と設備投資が必要になりました。当院は新型インフルエンザ対策として感染症外来を整備していたので、発熱患者を区分けして診療できましたが、そのような設備がない医療機関はテントで仮設診察室を設置するなど大変だったと思います。受診控えや人間ドック健診の休止などの影響も大きく、どこも経営は厳しさを増しています。

——閉める医療機関も少なくありません

人口減に伴い、県の地域医療構想でも地域の病床削